

<論文>大塚甲山「たゝき合」の構想

著者	今谷 弘
雑誌名	日本文学誌要
巻	31
ページ	14-26
発行年	1984-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019413

大塚甲山「たゝき合」の構想

今 谷 弘

「明治社会主義詩人グループ」の一人と小田切秀雄氏によって規定される(1)青森県上北町出身の大塚甲山に「たゝき合」(「戦争」の意)と題される詩群がある。稿本詩集「蛇蛻」中の第九巻、収めるところ『新小説』発表の反戦詩を中心として新体詩三十三篇、短歌・小曲・俳句十三篇、その成立は小山内時雄氏によれば、明治四十三年二月に青森県上北郡七戸町で第一次の編集を終え、同年十二月に東京市本郷区弓町で第二次の編集を終え、その際、第九巻を加除して「たゝき合」に変え、たものものであるという(2)。

甲山を明治社会主義詩人とする根拠の一つはその反戦詩についての評価でもある。例えば、八日露戦争当時大塚甲山ほどに精力的に反戦詩を発表しつづけた詩人がおらなかったのではあるまいか。V(3)、あるいは、甲山は「新小説」に初登場する。特に「今はの写しゑ」は九連城の実戦記に取材した反戦詩で、晶子の有名な「君死にたまふこと勿れ」より二ヶ月早いことが注目値する。V八数ある甲山の反戦詩のうち、圧巻の一つに数えられるものに、次の「露

軍月下の歩哨」がある。V(4)と特に二作をとりあげて評価された論稿もある。また明治社会主義詩と反戦詩のかかわりに踏みこんで、のより明瞭な甲山詩の本質への理解としては、八下積みの民衆のひとりひとりの「呻き」の声をあくことなく歌い続け、それはかれの反戦詩の系列と固く内面的に結びつきながら、かれのもう一つの系列を形成しているのである。V(5)という小田切秀雄氏の評価がある。

これらの論稿、評価に教えられながらも、私は「たゝき合」の反戦詩群を「詩群」それ自体として分析・評価した論のあることを知らない。詩一つを取り上げて論ずることの必要はいうまでもない。第九巻として編んだ甲山に働いた構成意識やテーマ意識、あるいはそれらの詩の特質、意味と意義、さらには時代的な位置づけといったもので、甲山が明治社会主義詩人として評価されながら、しかもその中心に反戦詩のあることを諸家に説かれながら、なお十分に闡明にされてきてはいないということがあるのだ。

試みに左に掲載詩と「たゝき合」詩群との異同対照一覧表を作っ

— 15 —

てみた。これからだけでも「たゝき合」が単純な寄せ集めの反戦詩集ではないことがわかるはずである。

短歌、俳句を除き、誌紙掲載の二十一篇の詩のうち「たゝき合」編集の際に改変のないものはわずか一篇にしかすぎない。小さいところでは仮名から漢字、またその逆、あるいは別字、さらに字句の変更、となんらかの推敲あるいは改作がどこかされている。しかも、これらの処置に加えるに「今はの写しゑ」を除き、発表順の変更ということがある。これらの意味するものは「たゝき合」編集にあたっての甲山の意識的な操作、意図的な構成と考えられる。ある明確な構成意識をもって配列された反戦詩群、それが「たゝき合」の世界だといえよう。

以下、手短かに「たゝき合」の詩を検討してみよう。

満てる屍の其中に、

若き大尉の傷つきて、

黄金の髪をみだしつゝ、

あえぎたふるゝ岩の上。

玉の口よりそゝぎ出る、

己の腕の血を啜り、

咽うるほす其様は、

繪に見る鬼の如くにて。

かくと見るより情知る、

少尉井上健吉は、

近く進みて背をし撫で、

露語をあやつり語るらく。

.....

あはれやのこる妻と子は、

モスクワあたりの夕間暮、

人の失せしも知らずして、

恙なかれと祈るらん。

世界の人のやはらぎを、

みだすはげにや筒の聲、――

爲まじきものはいくさなり

爲まじきものはいくさ也。

巻頭の「今はの写しゑ」。『新小説』掲載の四行二十一連の長詩から五・六・七・二十・二十一連を抜いた。この詩には素材がある(6)。明治三十七年五月十五日、日曜日発行の『国民新聞』二面四段目右中ほどに見える「敵の負傷副官」という記事で、総題が「激戦余聞(従軍第十信)」とあり、八五月三日午後八時〱戦地特派員梅田又次郎〱の署名入り全十一篇のエピソード中四番目のものである。甲山が作詩の際改変した部分は八腰江の北方〱を八九連城の山峡〱に、八副官〱を八大尉〱に、八少尉二ノ宮健吉〱を八少尉井上

健吉Vに、△重傷なればVとあったのを△眸をとほにとざしたりVとしたところである。もっとも大きな変更をうけているのは副官の謝意をあらわす贈り物で、二ノ宮健吉に△ピストル双眼鏡Vそれに△軍刀Vを添えようとしたが、△軍刀Vは受けとらなかったのが記事である。対して甲山の詩は大尉の贈り物が軍刀と△肌の守の写し△、すなわち写真で、少尉井上健吉は二つとも△これを収めVるのである。私は以前から△露語をあやつり語るらくVの部分を不自然な事として疑問に思っていたのであったが、この部分こそ実話からきたための動かせない条件であって、詩題にされ、もっとも重要なモチーフとみなされる△写し△こそ記事の中には見いだされえず甲山の創作にかかるものであった。

甲山は特派員梅田の武人をたたえようとするエピソードを△古里戀ふる心根は、／我たゞ君にひとしきをVと敵味方を越えた普遍的な人間感情、ヒューマニズムによって非戦の思想へと改変し、さらに終連の△爲まじきものはいくさなりVのリフレインによって反戦を明確にうちだしていくのである。井上健吉が軍刀を収めてしまうのも、その意識のあらわれと考えてよいであろう。自然描写からはいり、事件を叙し、人間の心の普遍性にいたり、思いをモスクワの夕暮れの家族に寄せ、反戦の意思を訴えるというかたちで閉じるこの構成もすぐれたものである。

ところで『新小説』掲載詩と「たゞき合」巻頭詩では異同がある。字句で△ありなれ江Vの雅語が△鴨緑江Vに変えられている等のこともあるが、なによりも大きな変更は四連と最終連の削除である。掲載詩の四連は削除すればすっきりする性質のものが、しか

し、最終連こそは△爲まじきものはいくさなりVの甲山のもっとも訴えねばならぬ反戦の意思の直接の表明であった。みようによっては『新小説』がよく掲載できたといえる部分なのである。戦時に活字化できたものが、詩稿として秘匿する時にその重要な部分を削除されている。なぜ、甲山はあえて削除したのか、そのことを作品群を検討したうえで考察してみたい。

「夕の思」は「今はの写し絵」の兵士の△古里恋ふる心根Vをモチーフとしている。△韓^{かん}の破壘の石垣に、／沈む紅日眺め詫び、Vる出征兵士が、△此夕雲を古里の、／妻は門辺にふり仰ぎ、／泪に暮れて祈るらん、Vと兵士の家族への思いと異国の兵役の淋しさを述べる。「漁夫の一家」は老母・妻・子供二人を抱える△若き漁夫Vに△召集の書Vがきて△血潮浪打つ遼の野Vに出征してゆかねばならなくなる話。ここでは家族のこれからの困窮が暗示されている。

「兵士居村を辞す」は発表時に「露国の」と検閲を顧慮してか冠せられていた作品。「漁夫の一家」の出征との関連でこの位置を与えられたか。明治三十八年三月の掲載なのですでに一月に旅順の勝利もある。そういう時期になお甲山はこういう詩を書いていたことになる。最初から三連をひく。

馴れにし里よ、いざさらば、

我今君に召されつゝ、

火箭に魂をうち碎き、

帰る術なき国へ行く。

井を鑿りて飲み、耕して、
汗の滴に食める身を、
飽く時もなくせめはたり、
更に血潮を召すと言ふ。

あゝかゝるより君もなき、
狄の国の慕はしや、
さらば鬪は襲ふとも、
肘を褒げて斥けん。

続く「月下の歩哨」も『新小説』発表時には「露軍」を冠せられていた。全九連から五・七・八連を抜き、左に示そう。

妻子の嘆聞き捨て、
征夷の歌に胸躍り、
奮ひ勇みつはるばると、
胡地の霞に進み入り、
いくその難堪へし身の、
今更我に立ちかへり、
深く顧み思はへば、
酔ひたる人の覚むるごと、
夢に夢見し心地なる。

あゝ彼民も我民は、

ひとり求むるものは何。
己の務いそしみて、
平和の夢を結ぶのみ。
只少数の人々が、
空し望の影に酔ひ、
幾十万の生霊を、
犠牲の壇に蹴やるのみ。

これを思へば刹那だも、
銃を保つに堪へなんや。
彼方に向けて放ちつゝ、
我同胞を殺すより、
己が咽にさし当て、
息の緒断つぞなかなか、
罪を悟れるものゝふの、
最後にとらん道なれや。

五連には甲山自身の非戦論へのめざめの投影があり(7)、七連には「今はの写しゑ」の発想と明治社会主義の階級思想がとりこまれている。そして八連は週刊『平民新聞』の第二十九号記事「戦場の大洗礼」によっている(8)。

「舟中の嬰兒」は、戦場のへ棚なし舟の中にVへとり残されしみどり児Vを歌い、へあゝ『太平の狗たるも、／乱離の民となる勿れ』Vと訴える。

次の「渡良瀬河」は再び舞台を日本にとり、「渡良瀬」河畔の仲睦まじい若夫婦のところに召集令状が届き、夫は出征。妻は丹誠こめて麦畑を作るが、それが五月雨の毒を含んだ濁浪にのみこまれてしまう。失意の妻のもとに追い打ちをかけて夫戦死の電報がまいこみ、妻は降りしきる雨の中、渡良瀬川に身を投じてしまう、というものである。反戦と公害をないまぜにしたこの詩も週刊『平民新聞』の西川光次郎の記事に素材を負うている(9)。

「戦場の花」、詩稿に(新小説)とあるが『読売新聞』に発表されたもの。「戦場の百合」は発表時「皆の百合」、「戦場の虹」を加えた三篇で「花」「虹」「百合」による自然と人事との対比、戦争の無惨さを印象的に歌う。

「高き誓」は戦死した時は賞賛された一兵士も時経て、へ乳呑児負ひし妻だけの墓参になってゆく様子を、「小浜の黄昏」は海兵として勃海に散った夫を持つ乳飲子を抱えた妻を歌う。「嬉戯する少年に寄す」は戦争遊びをする少年に対してへ人の平和の敵なる／いくさの様な学びそよ／と訴える。

「露宮の曉色」は再び戦場を舞台にして兵士の心を歌いへ地上をひたす曙の、／光の中に漂ひて、／神の力を讃美する時、／我も暫しの詩人なり／と感興を催す様子を記す。「新秋」は「詩人」の関連から甲山自身の詩に賭ける決意を訴えたもの。

「葡萄売の少女」「椰子の椀」は、父や兄の出征によって困窮した少女たちのことを、「俘虜」は故郷を思う俘虜の思いを、「流水人語を為す」はへ遼河のほとり秋立てば、／流るゝ水は嗚咽して、／人の言葉に語る／戦死者の思いを、代弁する。「夏の月」は「遼

河」の関連でここに置かれたか、甲山自身の戦場へはせる思いである。

「孤児」は旅順で戦死した父、その愁に亡くなった母のことを知らぬ乳飲子を描き、「遼東の図を展べて」は、十年の中に二度の戦場となった遼東への思い。「枝豆売」はへ大石橋の戦に、／夫は負傷の便あり、／病みたる母に／つかえて枝豆を売り生活を支える少女への共感。

「風雪の日軍人を想ふ」はへこの後とはに戦を／地の上に起すこと勿れ／という甲山の願いを記し、「パノラマ館」はパノラマの乱れた屍に見入っていた一日石の如く動かぬ老人が旅順攻撃に一人息子を戦死させた人であることを描く。旅順の関連による「月下のハーモニカ」は、うら若い中尉が旅順総攻撃を前にハーモニカを吹く話で末尾に(新聞記事)とあるので素材があることをうかがわせる。「老伶人行」は一人息子を持ったへ古谷音楽隊長のへ一月十四日／の旅順勝利の際の思いを忖度したもの。これも素材となった記事のありそうなことをうかがわせる。

「臘夜」は脱走兵の心を歌った異色の作品である。その三連をひく。

網の目

のこまかき掟やぶりつゝ
のがれ出でにし籠の鳥
明くるを待たぬ我がいのち
何ながらへんかゝる世に

親の名をさへ呼び得ざる

児をさき立てゝもろともに

暁け行く鐘をしるべにて

三途の川や越え行かん。

週刊『平民新聞』明治三十七年二月二十八日号に「憐むべき脱營兵」という記事がある。△脱營に刑罰の伴ふ事は兵卒として知らざる筈なし、而も猶之を敢てする者あるは何ぞや△として三つの脱走事件が記されている。甲山が人の情を軍紀よりも重いものとして、こうした素材を扱いたことに私は驚く。

「緑野」は「塞翁が馬」の翻案と見える作品。誤って農作業時人指し指を切り落とした若者が徴兵を免れ、命拾いする話。

「ローゼヴェルト」はアメリカ大統領ルーズベルトの調停に託した講和への願いである。「ローゼヴェルト」の表記は珍しいと思われるが『読売新聞』に例がある。「七月の比」は出征兵士の妻にむけて△和議の使は海越えて、△今や急げりアメリカへ△と和平の近いこと、夫がまもなく帰郷するであろうことをいったもの。

「帰郷の兵士」、日露戦争が終わり出征兵士が帰郷してきたが△昔の門に来て見れば、△迎ふる人の影もなく、△焼けにし家の礎の、△灰に青める草若葉。△いつこを指して尋ねべき、△行方も知らぬ妻や子を、△天空仰ぎて偲ぶれば、△乱れし髻に春風ぞ吹く△という下級兵士にとっては妻子も家も失った意味のない兵役の期間であったことを示す。

「鷗外先生の凱陣を迎ふる歌」は甲山自身が交わりを持った唯一

の実名の人としての作品である。四・五・六連を摘記する。

慈悲のおん手の柔しくも、

仇と味方のわがちなく、

癒やし給ひし我が大人よ、

いかにか見ます此様を。

そはさもあれや、戦は

人の心の野にすぎ、

今や国内の若人の、

手をし負はぬはいと稀ら。

大人よ、きのふは武夫の、

肌の痛手を救ひしが、

翌よりいかで人々の、

心の傷を愈やせかし。

日露戦後の人心の荒廃を鷗外の手によって癒せというのである。鷗外に託した戦後の希望によってこの反戦の新体詩の世界は閉じられる。

通読してきて作品群として見た時そこに浮かびあがる特徴は何か？第一に時間軸に沿った作品の配列、これがある。日露戦の推移にもとづいた構成を心がけた跡がある。陸戦の最初である五月一日九連城の戦（「今はの寫し繪」）からはじまり、満州、旅順、大石橋、旅

順の勝利、和議、帰郷、凱陣と描かれているのである。詩が発表順の配列でないことはすでに表によって示した。この配列による改作の例は「帰郷の兵士」に見られる。発表時には「枯草靡くなり」とあるのが「灰に青める草若葉」、同様に「乱れし髻に秋風ぞ吹く」が「春風ぞ吹く」と、詩稿では叙事の流れの中で季節の変更をうけているのだ。

第二は大まかに見てのことだが、出征兵士とその家族について戦地と内地の連鎖および対照が認められる。同種の素材を採るものが一群のものとして並べられる。また、戦地を語れば次は内地の妻子を、内地の困窮を言えば次には戦地の苦しさといった趣もみとれる。第三には、第二の特徴と関連して素材となっているのがほとんど無名の兵士達でありその家族である、ということがある。例外と考えられるのは「老伶人行」の古谷音楽隊長と最後の詩の鷗外だけである。無名の民衆へ視点をあてた戦争、そこに生じたエピソードということにこの作品群はなる。

第四にそれらのエピソードが新聞記事等の実話にもつき取捨が加えられていること、これがある。甲山は無作為にエピソードを拾ったわけではない。たとえ小さな記事、見落としそうな記事であっても己の心が揺さぶられたもの、琴線に触れたものであればこれを潤色して一篇の詩とした。「今はの寫し繪」や「渡良瀬河」がその良い例である。

これらの、時間軸による配列、戦地と内地の対照、無名の兵士達とその家族、縁者、そこに展開されるエピソード、この集成によって甲山が浮かびあがらせようとしたものは何であったか。「たゞき

合」の題が示す日露戦争という一つの大きな歴史社会的な事件、その発端から終結までというところは動くまい。そのとらえ方の特質が、事件や手柄やにあるのではなくて、あくまで下積みの民衆——兵士として駆り出された下層の民とその家族達——の妻子を、父や夫や兄やを案ずる憂いや、兵士としての良心の苦しみや困窮する姿を通しての怨嗟の声を描いたもの、といえないだろうか。民衆がいかに力弱く生命を、運命を、人生を戦争とそれを主導する国家によって翻弄されるか、その個々の姿が描かれているといっているのだと思う。もちろん、それは平民社の明治社会主義思想に覚醒したもののとしての甲山自身の良心の記録でもあった。

ここにいたって、私はようやく「今はの寫し繪」最終連の詩稿削除について答えることができるように思う。「為まじきものはいくさなり／為まじきものはいくさ也」のこの最終連の言葉こそ、「たゞき合」詩群全編をとおして表現されるところの中心思想だからである。すなわち、冒頭の詩において性急で概念的な反戦の言葉を直接にうたいあげることが忌避したのではないかと考えるのである。加えて「今はの寫し繪」そのものにおいても、最終連は具象的なイメージの収束と観念的な反戦意識の歌いあげと異質なものが混在する部分となって詩としてのまとまりに欠ける。おそらくこの二つが詩稿において最終連が削除されてしまった理由ではないだろうか。

こうして「たゞき合」の世界は十分明らかにされたか？ そうではない。次の詩を見ていただきたい。

無 感 覚

新聞では毎日それに関して、目出度づくめの記事を掲げて、感喜の涙を流した。

が、我は何とも感じなかった。

馬車が沢山並んで走った。兵隊も通った。

万歳の声が起った。

が、我は何とも感じなかった。

感覚のない青年は、寂しく屋根裏の借間にかへつて、そして麴麵屑を嚙った。

甲山の散文詩集「POEM IN PROSE」にある反戦詩二篇のうちの一篇、明治三十七年の作品である。口語自由詩の先駆的達成であり、甲山の仕事の大きな一つと私などは考えているが、これが「たゝき合」中に含まれなかったのはなぜか。また「蛇蛻」集第十卷「ソネット」これも明治三十七・八年の作品だが、その三十一番目には八軍にまなこ失ひておちぼを拾う独翁にやVという部分がある。これは当然「たゝき合」の世界の延長上にあるものであろう。だとすれば、甲山はなぜこれらを「たゝき合」に収録しなかったか。

再び「たゝき合」の構成をみてみよう。新体詩三十三篇と短歌四首、七七五の短詩一、俳句八句から成っている。とすれば甲山は散文詩ソネットの類の詩形を除いたことになる。単純に反戦詩だけを集めて「たゝき合」としたのではないことがこれでわかる。詩形をなぜ新体詩と短歌俳句に絞ったのか。それを私は、鷗外の『うた

日記』になぞらえたためと推測する。

『うた日記』は周知のように、明治三十七年三月満州派遣第二軍の軍医部長として日露戦の従軍を命じられた鷗外が、明治三十九年一月十二日東京に凱旋してくるまでの制作にかかる新体詩、訳詩、長歌、短歌、俳句から成る詩集である。その鷗外自筆といわれる広告文にいう。八新體詩家にもあらず、俳人にもあらず、歌人にもあらずといふ氏がものせられし長詩、十七字詩、三十一字詩の趣をば、これを見て知り給へ。V(10)。『うた日記』中には甲山宛の俳句、短歌もある(11)。甲山の三度目の上京、明治三十七八年戦役衛生史編纂事務所雇員となるについても鷗外の尽力であった。その明治四十三年十二月に「たゝき合」は編まれている。鷗外の伝手で上京できた甲山が、自身へ宛た句や歌を含む四十年発行の鷗外の『うた日記』を知らなかったはずはなからう。そして、「たゝき合」中の新体詩の最後は「鷗外先生の凱陣を迎ふる歌」なのである。風穴真悦氏によれば、甲山は青森県にいた明治四十二年一月「詩形一元論」を発表している(12)。そこでは正岡子規の名が甲山によってあげられている。詩形一元論を唱えながらなぜ「たゝき合」中に、散文詩・ソネットの反戦詩が加えられなかったか、先蹤として鷗外の『うた日記』がそこにあったから、と私は読みとる。

「たゝき合」は、甲山が私たちにむけたもう一つの「うた日記」であると私は見る。そこには鷗外のような、時に人道的な、時に好戦的な揺れがない。もっともそれは甲山の徴兵検査不合格による兵役の経験のないこと、週刊『平民新聞』との出会いによる非戦論へのめざめの二つのことによると思われるが。

明治社会主義に触れ、幸徳秋水や堺利彦と知りあっていった甲山は、明治四十三年には大逆事件の行方を見守っていた。そのことは甲山晩年の稿本詩集『蝸甲集』を読めばあきらかである。かつて、私は「キリストを想ふ」という幸徳をモデルとした作品の成立を十二月十日大逆事件公判を背後にする、と推定した(13)。甲山がそうした関心を一方に持ち、もう一方でこの十二月「たゞき合」を編集したのであれば、それは当然甲山自身の明治社会主義思想に対するより一層の明瞭な自覚となっていたことだろう。「たゞき合」中の新体詩の最後に鷗外を置いたのは、あるいは十二月十日、傍聴人としての鷗外(14)に対するはかない甲山の期待の意識、大逆事件被告人たちをなんらかのかたちで救ってほしいという願いの投影であったかも知れぬのだ。「蝸甲集」中に「無題」の詩がある。へきのふの言葉や泥／今日の忘れや風／やさしいかなハイカラのネクタイをつけて／都の春に翔るすがた。／我危き想ひをいだくゆゑに／我と交り我を世話するは／華族となるに妨となるか／あゝ今の世の博士。博士／＼全四連中の二、三連をひいた。漱石の博士号辞退をめぐり世上で賛否さまざまな批評があった。この詩の「博士」とはその一年半前に博士号を受けた鷗外のこと。とすればわずか三か月ほどの間に鷗外をこれほど批判する心理的落差があったことになる。甲山心中の劇としての大逆事件をめぐっての鷗外への期待と幻滅、これが働いたと私は考える。△鷗外が一定の立場上、意識的に避けたものと思う。甲山また暗に忌避されていたのであろう。▽(15)ことの反映ともみてよい。こうして甲山は明確な反戦意識のもと、民衆の怨嗟の声を「もう一つの『うた日記』「たゞき合」として編

集、のちの世の私たちに残した。

そういう「たゞき合」中に含まれている『新小説』掲載等の反戦詩が、なぜ晶子と違って非難・攻撃にあわずにすんだか。かりに、として私はこんなふうと考えてきている。第一に甲山が無名の人であったこと。『文庫』投稿詩壇では知られていたが、その活躍は俳句の方にこそあったと思われることがある。坪内逍遙の紹介によって『新小説』編集者の後藤宙外のはからいで詩を載せてもらうが稿料はなし。のちに宙外とトラブルがあり、文壇からも去ることとなる(16)。甲山の詩が新人の埋め草としての扱いであったことは、記憶してよいことだろう。第二にそうした甲山の詩の中で注目されたのは、田園詩風のものであったらしいこと。さきの宙外との衝突に関連するが、その原因となった徳富蘆花の甲山評価は△発達せられなば、或は我国の新バアンスとならるる人にあらずや▽(17)というものであった。非戦詩、あるいは反戦詩がそれとして注目されていない。第三に甲山の発表詩に対する編集者宙外の添削がある。これは詩題△露国の▽を冠したものもあるが、より具体的には「露營の曉色」二連冒頭にうかがえる。詩稿に△苦づく石を枕とし▽とあるものが、発表詩では削除されており、詩の行数が不揃いとなって不自然の感を免れない。甲山自身の推敲ならこういう処置は考えられないはずである。第四に政府の社会主義に対する取り締まりのことがある。荒畑寒村氏の『平民社時代』によれば、非戦論の初期に政府は国際世論を考慮して寛容な方針で臨んでいたという。第五に甲山の詩の掲載形式の問題がある。当時は総題のもと各題をつけて発表するのだが、甲山は反戦詩をそれとして並べて掲げたのでは

ない。とすれば見逃されやすいわけであろう。加えて内容自体の問題もある。「たゞき合」中に編集されたからこそ反戦の意思がくみとれこそすれ、一編だけ置かれればそう読めぬものもあるからである。最後に、エピソードとして語られた詩の性格も考えられる。エピソードなら人情の自然として読者が抵抗なく受け取る傾きをうむだろうからである。これらのことが甲山の反戦詩が自在にとまではいえぬが『新小説』や『読売新聞』に発表できた理由であろうと考える。

日露戦争時の反戦詩には甲山以外の例もある。例えば泡沫内海信之。第二次大戦後、明治四十七年七月から明治四十一年六月までの詩二十一篇を集め『硝煙』として刊行された。『国歌』『新公論』『新聲』がその発表舞台であったという。また、小杉未醒には『陣中詩篇』がある。従軍中に書きこんでいたという詩から選ぶところ二十六篇。中でも「罽毘塔の筆者」「病軍馬を悲しむの歌」は胸を打つものがある。それらと甲山の「たゞき合」はどう違うか。甲山の場合は泡沫にみられるような揺れがない(18)。一貫した明治社会主義思想の観点があること、まずこれがある。同じ二十一篇とはいえ、『新小説』と『新聲』等では雑誌の規模が違ふこと、これが二点である。さらに甲山は社会主義弾圧下で未発表詩をも含めて自ら反戦詩群として編集していたこと、これが三点である。未醒に対してはどうか。甲山は従軍の経験のない身で兵士の心を歌い、残された者たちの悲しみを歌った。リアリティーにおいて未醒に譲るが、題材の幅において、さらに経過をも浮かびあがせた長さにおいて持続する反戦意識は甲山の特色であろう。比較すれば「たゞき

合」は、やはり特異な反戦詩群というほかない。

△羽鳥と同じやうな手紙を己によこして、同じ役所の雇員になつて、去年肺結核で死んだ大塚寿助と云ふ男がある。甲山と云ふ名で、俳句を作つて、多少人にも知られてゐた。世間にはなんと云ふ不幸な人の多いことだらう。▽とは、周知の鷗外「羽鳥千尋」の一節である。風穴真悦氏は「詩人の終焉」の末尾にこれを引き△鷗外は、自らにとって必要な分の、大塚甲山追悼文を書いたのである。▽と厳しい断案を示され、その論稿を閉じられた。私は逆に鷗外のこの一言に、甲山的な、あるいは羽鳥的な明治的自彊やまざる青年たちに寄せる共感、哀惜の情を読みとるのである。大逆事件後の冬の時代に官憲から要注意人物とされた社会主義者甲山の名を記すことにはある危険が伴っていたであろう。いや、甲山の名をあえて記す必要はなかったとさえ私は思う。とすれば、やはり、甲山を高く評価し、哀悼するものが鷗外の内にあつたということになるう。

甲山は鷗外の『うた日記』の響みに倣い、己の『うた日記』として「たゞき合」の結構を整えた。『うた日記』の△「長詩」は、一見明治の過渡的な新詩形である新体詩に似てはいるけれども、むしろ『万葉集』の「長歌」になぞらうべきであり、またその「長詩」に附随する「短歌」は、万葉の長歌に対する「反歌」に当たるといふことができる。▽(19)という、その甲山の反歌にあたるもの。それこそがこの反戦詩の世界のエッセンスといふべきものを最後に示そう。

大連なる友に

夜風よふきちらしそ櫻花命ありてぞ人も見るらめ

殉道

村田筒とるかなしきに「やはらぎ」の名をたかよびて失せし友はも。

虚榮

あしなへの草刈る人よ緑野に誰に誇らん金のメタルぞ

小鳥

小雀も群にたのしむ人の子の何時まで剣とらんとすらむ

小曲

親は満州へ子は吉原へ同じ地獄へ生き別れ

父

稍暗しいくさの便くりかへし

母

更衣させん男の子はいくさ哉

妻

遠征の背子のかへらず小夜しぐれ

自然

青葉若葉は戦に狂ふ間を

戦場

草の葉に血潮流れて明やすき

虜

敵國の月に詩諷ふ虜かな

傷

手を負うて村へかへるや秋の風

墓

討死の新墓立ちぬ草紅葉

詩の世界の見事な凝縮である。この短詩をも含めて「たゞき合」は「為まじきものはいくさなり」という民衆の胸の思いを徹頭徹尾語ってやまないのである。

- (1) 小田切秀雄『現代文学史』上巻
- (2) 小山内時雄「大塚甲山詩集『蛇蛻』(稿本)覆刻」解題、『近代諸作家追跡の基礎』所収、以下詩の引用は復刻に拠る。
- (3) 藤井正次『大塚甲山遺稿集 詩集(下)』「解説」
- (4) 風穴真悦「大塚甲山研究——詩とその思想的傾向について——」
- (5) 小田切秀雄「木下尚江・大塚甲山・平沢計七」『明治・大正の作家たちI』所収
- (6) 拙文「大塚甲山の反戦詩」昭和五十七年十月二十六日『朝日新聞』「研究ノート」欄に概要を記した。

- (7) 拙稿「明治社会主義新聞と大塚甲山」『大塚甲山詩研究』所収
- (8) 注7に同じ。
- (9) 注7に同じ。
- (10) 「うた日記広告文」岩波版『鷗外全集』第三十八巻所収
- (11) なかのしげはる「大塚甲山の墓——鷗外の未発表書簡六つ——」。
風穴真悦「詩人の終焉 大塚甲山の場合」のち「日本文学史の後景——詩人・大塚甲山の終焉——」と改題して『日本文学史愁々』に所収が、中野が俳句一句、歌三首をあげたものにさらに俳句一句を追加し、この間の甲山と鷗外の動きを微細に追う。なお、風穴の追加一句は「凱旋や元日に出る上り汽車」で、傍点部「うた日記」では八乗るVとなっている。
- (12) 風穴真悦「大塚甲山研究——地方紙における諸活動——」
- (13) 拙稿「甲山晩年の詩世界——「蜩甲集」と大逆事件」前掲『大塚甲山詩研究』所収

- (14) 神崎清「革命伝説」3
- (15) 注11の風穴論文
- (16) 藤井正次「大塚甲山と文壇の人々——後藤宙外との往復書簡を中心——」
- (17) 後藤宙外「明治文壇回顧録」
- (18) 『内海信之 人と作品』解説「内海信之の反戦詩について」の向井孝氏は三期に分けて詩風の変遷を考察している。
- (19) 小島憲之「ことばの重み——鷗外の謎を解く漢語——」
- *引用詩・引用文とも旧字体・俗字体を新字体に改めたものがある。そのため不統一を免れなかった。御寛恕を乞う。

(一九七一年卒 青森県立板柳高校勤務)